

---

# 花粉症

saika

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花粉症

### 【Zコード】

N8040M

### 【作者名】

s a i k a

### 【あらすじ】

植物が好きなオレは、成人してから花粉症になってしまった。

それでも自然への思いを捨てきれずにいたオレの前に、一人の男が声をかけてきた。

自分の売っている植物を買ってみないかと…。

自分の血を一滴、水にまぜて『えるだけで、花粉には悩むことはな

くならぬのかと…。

この時期になると、オレは地獄を味わう。

くしゃみは止まらなくなるし、鼻はつまる。そして眼がかゆくて仕方無い！

つまり、花粉症というヤツだ。

幼い頃は平氣だったのに、20歳を越えた頃からひどくなってきた。

おかげで好きだった山登りができなくなつた。

薬は一時の物。マスクやメガネもあまり効果がなかつた。

自然が好きだったのに、今では無機質な物が溢れる都会に引っ越してしまつた。

おかげで最低限の予防で、何とか暮らしていく。

けれど時々、どうしようもなく自然に触れたい時があり、そういう場合は花屋で花粉の無い植物を買つている。

植物園とか行つて見たいけれど、危険が多そつなのでやめておいた。

今はちょうど花粉症の季節。

けれどどうしても植物が欲しくなつて、仕事帰り、花屋に寄りついと街中を歩いていた。

だがその日、仕事が押していく、花屋の閉店時間になりそつだつた。

だからいつもは通らない、裏道を早足で通つた。

大通りを一本外れただけなのに、ここでの空氣はおかしい。

どこか暗く、重い。ここにいる人達も、まとう空氣が何か違う。

怖くなつて思わず俯いていると、ふと植物が眼に映つた。

足を止めて改めて見ると、路上で植木鉢が売られていた。

まだ淡い新緑色の葉っぱは小さく、柔らかそうだ。

けれど見たことのない形だな。

自然には触れられないだけに、調べるのは熱心にした。

だから自分では知らない植物なんかないだろうと自負していたんだ  
が…。

「おや、お客様。興味がありで？」

植物をじっと見ていたオレに声をかけてきたのは、植物を売つてい  
た男だった。

漆黒のマントを頭からすっぽりとかぶり、見えるのは男のニヤけた  
口元だけだつた。

「あつああ…。見たことない品種だが、新種なのか?」

「ほお…。植物にお詳しい方で?」

「趣味だけどね。でもひどい花粉症で、残念ながら花粉のある植物は買えないんだ」

「ふむ…。しかしお客さんなら、大丈夫かもしませんね」

「花粉はそんなになものなのかな?」

「相性によりますがね」

男は意味ありげに笑う。

「」の植物は自分の持ち主を選ぶ。気に入った主人には、美しい姿を見せてくれるんですよ

そう言つて一つの鉢を上げて見せる。

「だつだが花粉が…」

「なあに。お客さんと相性が合わなければ、花は自然に枯れます」

「そつそれじやあ花がかわいそつじやないか!」

「ふふつ。お客さんはお優しい。…おや?」

男が不意に視線をそらしたので、思わずオレもそつちを見た。

数ある植木鉢の中の一つが、小さな花を咲かせていたのだ。

… わざわざまで、つぼみもなかつたハズなのに。

「この「」お密さんを気に入つたみたいですね。この「ならば、花粉に悩まされることもないと思いますが?」

「しかし…」

やつぱり不安だった。

こんなに躊躇するぐらい、ひどい花粉症なのだ。

「…ながらしてられないか? もし花粉がひびかつたら、引き取つてくれ。その時返金はしなくてもいいから」

「ふむ…。いいでしょう。お密さんが気に入らなければ、返却してください。お金は売った方に咎がありますから、お返しますよ」

「だが…」

「良こんですよ。こちらには自信がありますから。お密さんが必ず満足するところ自信が、ね」

あまりに男が自信ありげに言つので、渋々承諾した。

植木鉢は小さいにも関わらず、良い値段がした。

けれど男は取り扱い説明書を付けてくれた。

それに返却するなり、全額返済ときた。

疑わしいながらも、オレは好奇心が勝ってしまった。

家に帰るなり、説明書を読んだ。

【?水は一日に一度、コップ一杯】えてください。

?やる時は陽の当たらない場所でお願いします。

?植物の成長を早める為には、お客様の血を一滴、水にまぜてください。栄養となり、植物の成長に良い影響が出ます】

「…血?」

「JIRIでかつた男との会話を思い出した。

「花粉の心配ですが、植物にお客さんの体質を合わせれば良いのです」

「合わせる? どうせいい?」

「それは説明書に書いてありますよ」

「なるほど。いつことか。

血を水にまぜる」と云つて、オレの花粉症体質を、花に合わせてもらひつか。

それにもしても、人の血が栄養になるなんて…絶対日本産ではないな。

あの男も日本語が上手かつたが、肌の色は黒かつた。

それに顔の半分しか見ていないが、日本人としての顔立ちではない。

さしづめ自國の植物を売りに、出稼ぎに來た外国人か。

まあそんなヤツがいたって、不思議じゃないがな。

それに植物は日本に輸入するとき、検査を受けているだろうし。

多少妙なところがあつても、買った本人に影響<sup>響</sup>がなければ良いんだ。

オレは説明書に書いていた通り、水をコップ一杯用意した。

そしてちよつとイヤだつたが、針で指先を刺し、一滴の血をまぜ、植物に与えた。

今はもう深夜だ。陽が当たつていなければ、良いだろう。

オレはその日、そのまま眠つた。

植物の成長のことと思い浮かべながら…。

自分がどんな恐ろしいことをしたのか、考えもしないで…。

翌日、起きて見ると植物の異変に気付いた。

昨夜、葉っぱは淡い色だったのが、今ではハッキリとした緑色になつていた。

「コレ…栄養のおかげ、か？」

にしても、あまりに激変過ぎる気が…。

でもまあ、悪いことじゃないよな?

オレは気がかりになりながらも、会社に出勤した。

そして帰り道、あの男へ会いに行こうと思いつつ、裏道を歩いた。

しかし、男はいなかつた。

「今日は来なかつたのかな?」

路上だし、そういうこともあるだろ。

オレは家に真っ直ぐに帰つた。

そして水をやるひとした。

しかし予想以上に針を深く刺してしまい、血は3滴ほど水に入つてしまつた。

「やっぱ…。でも説明書には多くやるなって書いてないよな?」

改めて、説明書に眼を通す。

【?お客様が撒いた血の量に応じて、植物の成長は変わります。  
お客様のこの希望を受け、美しい姿を見せてくれます】

「…なら、平氣か」

オレは大して考えず、水をやつた。

「IJの調子の成長なら、そろそろつぼみの一つか二つ、見ても大丈夫そうだな」

買った時に咲いていた花は、すでにしぼんでいた。

他のつぼみはまだ、葉っぱと同じ色をしていて、触ると固かつた。

けれど昨夜よりは格段にふくらんでいる。

「…どんなふうに咲き誇るのかな?」

昨夜の一輪の花では、花粉症は起きなかつた。

けれどあの花はあまりに小ち過ぎる。

この植物の形態であれば、小さな可愛らしさに花がたくさん咲くのだ  
らい。

その時が楽しみだ そう思つていた。

この時までは。

しかしながらも翌朝、びっくりした。

あれほど固かつたつぼみは、今や色を変え、柔らかそつてふくらみ

でいた。

「そんなまさかつ！」

おやるおやる触れてみると、確かに柔らかい感触。

鼻を近付けると、甘い匂いがかすかに漂ってきた。

「…血が、栄養になつてているのか」

にわかには信じられなかつた。

しかし現実は目の前にある。

オレは不思議な高揚感を感じた。

この植物は、まるで血を分けた我が子のようだ。

おかしな言い方かもしだれないと、オレの血を栄養として、ここまで成長するなんて、自分の子供とも言える。

オレはしかし、心残りがありながらも、会社へ向かつた。

収入を得なければ、オレが生きていけないから……。

けれど本心を言えば、この植物の側にずっといたかつた。

成長を一時も眼を離さず、見つめ続けていたかつた。

オレは仕事が終わると、走って家に帰つた。

植物は朝見た時よりも、少しづつほみがふくらんでいた。

オレは買ってきたミニネラルウォーターを開けた。

今まででは水道水だったけれど、植物用の水もあるのだ。

途中、花屋で買ってきた。植物に良いと思つて。

カツブにっぽい分そぞぎこむと、今度はカッターで指を切つた。

ボタボタ…

透明な水が、赤い血がまじり、濁る。

けれどそれを植物にそぞぎこむ。

「これで元気になってくれよ  
くれるのか、楽しみだ！」

翌朝、起きて見ると、予想が的中した！

花が咲いていたのだ！

淡いピンク色の、可愛らしい花々が咲いていた！

そして柔らかくも甘い匂いが、部屋に満ちていた。

けれど花粉症の症状は起きない。

「やうやくあの男が言った通り、本当に相性が良いみたいだ。

オレとこの植物は。

オレはもう、仕事に行く気をなくしていた。

それどころか眠るのがもつたいた。

この植物の変化を、この眼で見続けていたいと考えていた。

けれど水を飲えるのは、1日に一度だけ。

飲え過ぎると死んでしまう。

だから夜までじっと待った。

花は夜になつても咲いていた。

そして水を飲える時、オレは手のひらをカッターで切り裂いた。

ブシュッ！

ダラダラと血がコップに流れる。

水がピンクに染まるべつこになつて、よつやく植物に飲えた。

そして今夜はそのまま起きていた。

するとその植物の変化を見ることができた。

ピンクの花は、オレの血を吸つてか、鮮やかな赤い色に染まつてい  
く。

「スゴイっ……！」

オレはすっかりこの植物に魅入つてしまつた。

そして甘い匂いも強くなつた。

深呼吸すると、頭の中がじいんとしびれる感じがたまらない。

「はあ……」

久々だつた。こんなに深く、花の香りを嗅ぐのは。

花粉症になつてからといつもの、自然から遠ざかつたのは心理的に  
きつかった。

それまでオレを癒していたものが、いきなり牙をむいてきたのだか  
ら……。

でも今はこの植物がいる。

側にいて、オレを癒してくれている。

良い値段はしたが、決して高くはない買い物だつたな。

そつ思いながら、植物を置いている部屋で寝た。

スゴク良く眠れて、寝起きも最高だつた。

夜通し起きていたせいか、起きた時はすでに夜だった。

オレは包丁を持ち出し、血管をさけながら、手を切り刻んだ。

水半分・血液半分を、植物に与える。

すると今度は、枝が伸び始めた。

小さな鉢ではきつねうだつたので、中ぐらいの鉢に植え替えた。

植物は嬉しそうに、あつと言ひ間に鉢に合ひついに成長をとげた。

枝を伸ばし、葉を生やし、花を咲き乱れさせた。

花は美しい濃い赤に染まった。

「キレイだ…」

まるで赤ん坊から、大人の女性へと変貌したよつな…。

オレの血が、ここまで美しくさせたんだ。

それならば…。

オレはフラッと立ち上がり、包丁を手に取った。

そして…。

数週間後。

会社を無断欠勤し続けた男性のマンションの前に、会社の上司と警察、そして管理人が訪れていた。

みな、心配そうな顔をしている。

彼の部屋からは濃く甘い匂いが漂っていたが、全員その香りに顔をしかめていた。

何せこの匂い、まるで熟れ過ぎた果実のような匂いをしているからだ。

管理人が扉を開き、全員が部屋に入った。

そしてリビングの扉を開けたところで、

「ううわあああ！」

異様な光景を眼にした。

リビングの部屋の中は、植物の枝が広がり、黒き大輪の花がいたる所に咲き誇っていた。

そしてその植物の根には、彼の体があつた。

全身の血を植物に吸われ、茶色に干乾びた体が、枝に絡まれ、根を下ろされていた。

甘い香りは、この花から発せられていた。

彼の手には、説明書が握られていた。

そこの5番田の注意書きには、

【?  
お客様の与える血の量に対し、植物は成長いたします。しかし  
「え過ぎにはくれぐれも」注意ください。植物が暴走なさつても、  
お客様の責任となりますので…】

路上で植物を売っている男は、風に乗つて漂ってきた甘い匂いに、  
笑みを浮かべた。

「ああ、あのお客様。よっぽど気に入つたんだねえ。こんなに美  
しく咲かせてくれるなんて、植物冥利につくな。お前達」

男の声に、植物達がかすかに動いた。

そして植物を見て、足を止めた女子高校生が1人。

「わあ、可愛い！」

しゃがみ込み、植物を見る女子高校生に、男は笑顔を向けた。

「いらっしゃい、お客様。美しい花は好きかい？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8040m/>

---

花粉症

2011年1月12日23時42分発行